

火星



平成19年7月号

七曜抄

(四)

山尾玉藻

かぎりなく沈むといふを夜の牡丹

住吉の松風に生れ早苗風

六月の伊吹山にこころ置きにけり

甲冑の音に見返る木下闇

ひと叢の夏水仙の夕げしき

背泳ぎの喉ゆつくり夜をすすむ

みんなんや菩薩の大き耳飾り

雀らに芭蕉の花の落ちゐたり

みづうみに沖のありける忍かな

水槽の蛸の眼うごく夕立中

太白星

柳生千枝子

寂しさの極み孤りの麦畑
麦秋の雲のゆたかに移りゆく
麦秋の風の彼方に海青し
風五月風の行方を見てをりぬ
風五月青葉の色の服を着て
短夜の夢絶たれたる空しさよ
短夜の目覚め独りは堪え難し

杉浦典子

頬白の群れて椿は日向の木
春嶺がすぐそこ馬場に風生まれ

海女乗れる舟のもつとも揺れてをり
出航の水買ひにけり鳥曇
春眠のつづきにゐたる海虎
寄席出でしこゑの過ぎゆく夜の桜
あめんぼのふんばる影のふんばれる

浜口高子

いたどりのくれなゐと背を比べたる
洞出でて洞に入る間の春の月
海風に静脈の泛く孕馬
夜桜やあしかの水の真つ平
サングラスに倣うて覗くあめふらし
虚貝のくれなゐ拾ふ目借どき
水軍の碑に日の当たる端午の日

火星作品

山尾玉藻選

初花の人目に触れるところより
明石 戸栗末廣

朝ざくらの素顔きれいなひとに会ふ

ざりがにの馬穴をかじるさくらの夜

花ミモザ風に重さのありにけり

へそくりの底をつきたる春の鴨

手にぬくき赤福餅や初燕
八幡 大山文子

葉桜や乱歩全集蔵の中

若葉光沖の潮目のほどけたり

つちふるや潮目を越ゆる揺れにあり

身の内に船酔ひ残る葱坊主

学校の垂れ幕かかり水温む
大和郡山 城 孝子

人の家に昼湯たまはる養花天

脱衣籠花の疲れのものあふれ

向き向きのテトラポッドに燕くる
空のプールに松の影あり目借時
梵鐘のかたへの桜ふくれたる
花どきの水着絞つてをりにけり
げんげ野にぽあんとありし馬の糞
対岸のさくら散りくる砂場かな
金婚のゆたかに降れる桜蕊
かげろうて同窓会の来る暇
春の雨耳朶くれなゐに文楽座
春耕に弁当包み振りたる子
春雷や平らにうごく雨ふらし
水槽の豆腐からつぽ囀れり
花冷の御車寄せに家鴨きし
東山へ飛石つたふ春日傘
友の忌の空の一点揚ひばり
競馬新聞のあはひに座しぬ蓬餅
つちふるや四方に襖絵めぐらせて

西宮 米澤光子

宝塚 山田美恵子

八幡 丸山照子

選のあとに

山尾 玉藻

初花の人目に触れるところより

戸栗 末廣

「人目に触れるところより」は、「初花」に密やかな意思があるかのような表現である。しかし実は、漸く「初花」と出会った作者のこころ踊りを、巧みに裏返しにした表現なのである。この手法の手柄は、「初花」と人間の関わりに仄かな床しさを感じさせるところにある。同時発表作へへそくりの底をつきたる春の鴨はごく瑣末な内容ながら、季語の配合のよろしきでちよつとしたペーソスを漂わせる一句となった。

つちふるや潮目を越ゆる揺れにあり

大山 文子

遠日にする「潮目」はゆつたりとスケールの大きな景であるが、現実には潮のエネルギーがぶつかり合う激しい現場である。作者の乗る船はそこを過りながら、かなりややこしく揺れたに違いない。季語「つちふる」がそれを否応無しに語っている。

学校に垂れ幕かかり水温む

城 孝子

「祝・創立〇〇周年」や「祝・〇〇部全国大会出場」などの長幕が、学校の屋上から垂れ下がっているのをよく目にする。学校に無縁の通りすがりの者でも、何となくこころ嬉しくなる景である。この何となくこころ嬉しい想いが、「水温む」の本意なのである。季語にブレがない。

梵鐘のかたへの桜ふくれたる

米澤 光子

「梵鐘の」の表現には、「音が響いて」の意が含みもたれており、ぎりぎりの省略で成った一句と言える。「梵鐘」はあくまでも媒体であり、眼目は「桜」である。「梵鐘」の物質感が直でしたたかであるだけに、「かたへの桜ふくれけり」の虚に実が生まれ、大いに納得させる力がある。いたずらに意表を突いた表現ではなく、「梵鐘」との関わりで「桜」の言霊を浮き上がらせているのである。

かげろうて同窓会の来る暇

山田美恵子

少々臺の立った「同窓会」ではなからうか、「かげろうて」がそう思わせる。「暇」を揺れながら来る人たちに、懐かしい学舎が見え始めたよう、読み手のこころも浮き立ってくる。鳥羽吟行の車中のしりと吟の一句であり、作者はかなり柔らかかたまの持ち主である。

前輪の陸を離るる青葉潮

河崎 尚子

今しも飛行機が離陸する景である。「前輪の陸を離るる」の活写により、後輪にかかる機体の重量感までも実感させ、充分に臨場感がある。言うまでもなく、明るく躍動する「青葉潮」がそれを増幅させている。同時発表作へ口あけて三和土をすべる桜鯛は、徹底して即物的だが、一句の定着力は強い。

恒星圈

河崎尚子

葉桜に風のある日や微熱の子
油まじ岩の上で食ぶ手こね鮓
雨降らしの角の紫目借時
両の手に幹なでおろす桜守
朧月震うて魚は卵生む

加藤君子

木野本加寿江

花吹雪吾足るを知るうべなるや
平成の生れ子ばかり春の土
天王寺の膝元に棲み彼岸かな
めんどりの叫び上がりし莖立菜
息をのむ色と思ひし桃の花

ひとり行く桜蕊降る投票所
花冷の濠へ垂れぬる釣の糸
朧月目覚めし刻の養命酒
弟の背を撫づる眼に桜草
花冷の昼を熟睡の猫とゐて

金澤明子

小林成子

春潮や午前七時の窓辺まで
若布ひろひ拾ひ夕日に染まりをり
かけ直す眼鏡に海女の三人かな
花びらをくぐりて目高沈みけり
青世界の深みに水車廻りをり

紙縫立つ文学館の遅日かな
日曜のミサの扉開きぬ花ゑんど
桜薬ふるドツヂボールの円のなか
山笑ふたかゑさんちの碧い屋根
たんぼぼの莖そろへあるベンチかな

獅子座

山尾玉藻推薦

助口弘子

逃げ水の向う父母うしろ向き
天窓を雲の流るる昭和の日
花水木握り返されたる力
川風の寺田屋あたり初桜

渡邊美保

猫車伏せある河馬舎日の永し
大櫂の芽吹きの下象の尻
風光るパンダの糞の萌黄色
犀の背の泥乾びぬる花の下

岩井ひろこ

花衣夫に言ひ訳ふたつみつ
持ち上げし葉罐からつぽ花の昼
たんぽぽの絮と知りたる歩道橋
春の昼二階の電話鳴つてゐる

松山直美



弁天の在す巖や鳥交る
渡船場の水底覗く春日傘
柳紫とぶ花街にある乱歩館
それぞれに植ゑどきのある代田かな

蘭定かず子

水路橋のアーチに春の蝶現るる
さへづりの楠の下なる骨董屋
げんげんの畦を踏みゆく探鳥会
巻貝のこぞり舌出す目借時

森茂子

おほかたは摘み落されし桃の花
桃咲いて観光バスの来たる郷
迷ひ人の村の放送桃の昼
なすことのなき雨の日の桜餅

藤田素子

今日からは少し早起きチューリップ
春愁や土砂噛みこぼすシャベルカー
春の日に目を細め合ふ喪服かな
リラの花神は意地悪かと思ふ